

INDEX

- ① 巻頭言
- ② 児童施設より
- ③ 高齢者施設より
- ④ 役員会報告
- ⑤ 法人たすきリレー
- ⑥ 法人リーダー研修
- ⑦ 表彰受賞者一覧
- ⑧ 第28回法人研究発表会
- ⑨ あすなる創立20周年

社会福祉法人 宝山寺福祉事業団 〒630-0257奈良県生駒市元町2-14-8桃李館内 TEL:0743-74-1172/FAX:0743-74-1911

巻頭言

「恕」

理事長 辻村 泰範

最近、時々「論語」(岩波文庫 金谷治訳註)

を読むようになった。誘われて、論語を愉しむ会に参加するようになったからでもある。会員は石平先生(テレビでお馴染みの日本に帰化した中国人評論家)の論語の注釈や現代中国政治などの講義を聞き、先生を交えてのざっくばらんな意見交換を楽しむのだ。

ある時、請われて色紙に一筆描かなければならなくなって、忠恕と記した。そのことを石平先生に話したら、いい言葉だねえと褒めていただいた。だからというわけではないが、昨年オーストラリアのカウラに慰霊訪問する機会があったので、お土産に色紙を持っていくことになった。下手な字をなんとか取り繕おうと色紙に「恕」一字と絵を添えて数枚の色紙を用意した。

論語にこんな一節がある。弟子が先生に、一言だけで一生行っていけるといいうことがあるでしょうか、と尋ねたところ孔子先生は「まあ恕だね」と答えたというのである。恕とは、思いやりとか、ゆるすという意味の言葉だ。堪忍してやるという単純なものではない。

許し認めるといいう堅苦しいものでもない、相手の心情を汲み取ることであり立場を入れ替えて思いを致すことも含んでいるのだろう。生涯を貫く姿勢や立場を示す一字を示されたのだが実に深い意味を含んだ言葉だと思ったのだ。

日本は太平洋戦争で連合軍の同盟国であるオーストラリアと激しく戦った歴史がある。その結果強い反日感情が巻き起こっていた。しかし、最近の世論調査ではオーストラリアが最も信頼できる国として日本が挙げられているという。

(※2ページにつづく)



サマンサ・モスティン連邦総督に色紙を贈呈

戦争の悲劇や渦巻く反日感情を超えて
和解と日豪友好の絆を築くために生涯を
かけたトニ・グリーン神父は亡くなつてす
でに30年が経つ。彼がその活動を振り
返つて述懐していた言葉を思い出した。
和解の象徴として日本刀(戦利品として
軍人が保有していた軍刀)の返還を説得
しに何度も元將軍の自宅を訪れた結果、
最後に彼は「忘れることはできないが、
許すことはできる。」と言つて神父に刀
を渡したというのである。

グリーン神父に誘われ、導かれてダーウ
イン、シドニー湾、カウラの戦跡で仲間
の僧侶と共に慰霊の法要を行つてきた。
その都度感じたのは、オーストラリアの
人々の温かさだった。

昨年の5度目の訪豪は、カウラの暴動
事件の80周年記念の式典であった。カ
ウラの捕虜収容所跡地、日本人墓地での
記念法要には日豪政府要人も参列しての
盛大なセレモニーに感動した。



鈴木量博大使、堀井巖参議院議員を両サイドに千本倅生夫妻と共に



官邸応接室にて芳名録に署名

首都キャンベラでは、代表がオースト
ラリア連邦総督官邸に招かれるという僥倖
に恵まれた。総督がカウラの慰霊法要に参
列できなかったのでいらっしやいという
ことになったようだ。オーストラリア連邦
という国はもちろん独立国ではあるが、
かつての大英帝国の名残でイギリス連邦
に属している。連邦総督はチャールズ国王
から任命された国王の名代としてのオー
ストラリアの元首であるという。鈴木駐豪
日本大使の先導で応接室に通された我々は
代表3名が総督の立ち合いのもとに芳名録
に署名し、記念写真の後、件の色紙を
差し上げた。

今ではオーストラリアと戦つたという
歴史さえ知らない人が増えている。罷り
間違えば怨念だけが残つたかもしれない
戦争の悲劇がグリーン神父をはじめ関係者
の努力もあつて友好国としての信頼を獲得
することができたのは、オーストラリアの
人々の「恕」の精神にあつたのではと、
日本国民としてささやかな感謝の気持ち
を込めたつもりである。



高齢者施設より

3p ■ 特別養護老人ホームあくなみ苑

5p ■ 特別養護老人ホーム延寿
■ 梅寿荘デイセンター

7p ■ デイセンター寿楽

4p ■ はあとぼーと梅寿荘
■ 特別養護老人ホーム梅寿荘

6p ■ 梅寿荘居宅介護支援センター
■ 生駒市梅寿荘地域包括支援センター

あくなみ苑の新しい船出を目指して 特別養護老人ホームあくなみ苑

事務長 中 幸 司

『あくなみ苑』は、平成8年12月に老人福祉施設三室園組合(西和7町で設立)により設置された施設であります。令和8年4月からは30年の時を経て新しい船出をすることが予定されています。

令和6年7月に同組合より、貴法人に譲り渡したい旨の打診があり、同組合とも丁々発止の議論を重ねながら、地域のセーフティーネットの一翼を担うために受諾するべく検討しているところです。

あくなみ苑は、当法人が平成12年4月から運営の委託を受け、また同28年4月から指定管理者として、長年にわたり施設運営に携わってきている施設であり、たとえ譲り受けた後においてもこれまでと大きく変わるものではありません。

しかしながら、名実とともに施設の設置者・管理者になることにより、ご利用者へはもちろんのこと、地域や社会に対して責任を負うという使命を果たすことが求められます。これまで同組合が担ってきたもの以上のことが当然求められると認識を新たにしているところです。

法人の介護理念にある『あなたらしさを いつ

までも』を念頭に、ご利用者一人ひとりに手を添え、言葉を添え、心を添えた介護に努めることはもとより、ご利用者の皆様に安全で安心した日常生活を送っていただけるような施設づくりを心がけてまいりたいと考えています。

また、施設も30年の齢を数え、建物には損傷した箇所や設備にも不具合な箇所が多くあります。このご時世、大規模な改修をすることは難しいものではありませんが、こうしたところにも気を配りながら、少しでも快適な環境を提供できるよう尽力したいと思っています。

高齢者施設の経営環境は厳しい状況にあり、あくなみ苑も例外ではありません。このような中で、施設を譲り受けるには相当の覚悟をもって臨む必要があることは言うまでもないことですが、新たなことを創造できるチャンスでもあると捉え、準備を怠ることなく万全を期してまいる所存です。職員の皆さんと心ひとつにして、「新生あくなみ苑」という船がこの厳しい介護業界の荒海に意気揚々と漕ぎ出せるよう努力してまいりたい。

「3つのワーク」を大切に

昨年、大学卒業後40数年ぶりにクラブのOB会がありました。先輩の一人が長く地方行政のお仕事に関わっておられて、「これからの地域活動には何が必要かわかるか？3つのワークを考えてみて」と問いかけられました。しばらく、皆で考えて、「フットワーク」「ネットワーク」「チームワーク」ですと答えると、この3つのワークを実行していくことが大切だと話されました。

私達介護の仕事にも相通することだと思いました。困っている人がいればすぐに駆け付けけるフットワークの軽さを持ち、困っていることを見つけて、解決するための必要な情報を集めて協力してく

はあとぼーと梅寿荘

主任サービス提供責任者 金田 智子

れる体制、ネットワークの構築を図る、そして実践するサポートのチーム力を高めていくチームワークが大切です。

実際に、私たちの現場では、地域包括支援センターからの相談をきっかけに訪問を開始することが多いです。訪問してから、ご利用者の生活の中で、問題点を見つけ支援をしていますが、そこへ多職種との連携を取り、ヘルパーが共通の目標を達成するために協力することを目指していくことが必要です。以上の3つのワークを大切に古い殻を脱ぎ捨てて今年1年躍進していこうと思います。

令和6年度を振り返って

4月は、介護報酬改定があり準備等でバタバタとしましたが、新採用の職員を仲間に迎え、私たち職員も気持ち新たに今年度がスタートしました。

4月下旬～6月は、新型コロナ感染症ではなかったものの、肺炎様の同じような症状で入院されるご利用者が多数おられ、基本の感染対策の徹底とご利用者のケアに必死に取り組んだ期間でありました。ご利用者の体調、健康管理には配慮しつつも、今年度は、コロナ禍のような制限をかけ過ぎることなく日常生活を送っていただけるように努めてまいりました。

8月の夏祭りでは、ご家族やボランティアの方々にも多数参加していただき、屋台や盆踊りを一緒に楽しみ、9月の敬老会では、昨年まで感染対策として各フロアに別れて開催していましたが、今年度は地域交流ホールに一堂に会して、職員の心と熱のこもった出し物を楽しんでいただきました。11月には久しぶりの外出行事を行い、各ユニットから数名ずつではありましたが、紅葉を見にドライブに出かけました。寒い日もありましたが、参加されたご利用者からは「きれいやなあ。」との感想をいただき、笑顔で落ち葉を持って写真撮影している様子を見て、とても嬉しく、温かい気持ち

特別養護老人ホーム梅寿荘

主任生活相談員 黒川 美穂

ちになりました。11月に入り、世間ではインフルエンザが猛威を振るい、再び感染症のリスクに怯えながらの年末年始でしたが、なんとかご利用者が感染症に罹ることなく穏やかに新年を迎えることができました。

来年度もこれまでの経験や学びから感染症対策について締めるところ、緩めるところメリハリをつけて実施し、また医療との連携、口腔ケアや排せつ支援等基本的な介護のスキルアップにて、ご利用者が安定した体調で過ごせるようにしていきたいと思います。



紅葉ドライブ

日進月歩

新型コロナウイルス感染症から5年が経ち、これまで設けられていたあらゆる規制が緩和されました。しかし、コロナ前に完全に戻るのではなく、コロナ禍による影響を伴いながら新しい形に変化させ、施設も行事が行えるように少しずつ緩和させ前進して参りました。そうして、今年も延寿の年中行事の花火大会・敬老会・秋祭りを無事に開催することが出来ました。利用者様は勿論のこと、家族様も人数制限はありましたが、皆様と一緒に楽しむ事が出来て嬉しく思います。

私たち職員は行事の成功を目標に計画を立て準備をする中で、信頼関係や達成感を味わい、チームとして団結し完遂できた事に改めてチーム

特別養護老人ホーム延寿

特養リーダー 清見 富美栄

ワークの大切さを感じさせて貰いました。行事に携って下さった他施設の方々、利用者様家族様、改めて感謝申し上げます。

延寿では、帆船で例えると追い風の時はスムーズに進みます。また、向かい風になったら逆らわないように風を斜めに受けながらジグザグを繰り返して変化しながら前に進んで行きたいと思います。

年末にコロナ感染者拡大してしまい入院者も多くなってしまいました。利用者様には大変な思いをさせてしまいました。再度感染症対策を徹底し、『日々の生活を楽しむこと』を忘れずチーム全体で前進していきたいと思っています。

新年度に向けて

梅寿荘デイセンターでは、新たなスタートを前に、今年度を振り返りながら次年度への準備を進めていきます。今年度は、ご利用者の皆さんと充実した時間を過ごせた一方で、職場内でのコミュニケーションに課題を感じる場面もありました。そこで、新年度は「風通しの良い職場づくり」と「質の高いコミュニケーションの実現」を目標に掲げていきたいと思っています。

風通しの良い職場をつくるためには、日常的なコミュニケーションの質を高めることが欠かせません。スタッフ一人ひとりが自由に意見を交わし、それが尊重される環境を整えることで、働きやすい職場が生まれます。そのために、定期的なミーティングの継続、意見交換の場を設けることにより、これまで以上に建設的な対話ができるよう努めていきます。

梅寿荘デイセンター

生活相談員 中井 耕大

また、私たちは日々の業務の中で、「相手の立場に立った言葉選びや対応」を意識し、ご利用者の声にも丁寧に耳を傾けてまいります。チーム内においても、相手の意図や感情を汲み取りながら対話を深めることで、信頼関係の強化・チーム力向上を図り、ご利用者の皆さんに対するサービス向上に繋げていきたいと思っています。

さらに、ご利用者やそのご家族、そして地域との連携においても、情報共有をスムーズに行い、どなたに対しても心のこもった対応を心掛けることで、信頼されるデイセンターを目指していきます。

新年度は、職場内外でのコミュニケーションの質をさらに高め、風通しの良い職場を実現することで、ご利用者一人ひとりが笑顔で過ごせる環境を作っていきます。今年もスタッフ一同、心を一つにして取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今年度取り組んだこと

昨年の石川県能登半島地震から1年が過ぎ、また今後いつ発生するか分からない災害に不安な日々は続いています。

災害時事業所でできることは何かと考えると、継続的な事業の運営・利用者の安否確認方法・医療度の高い利用者の避難について等課題は沢山です。

生駒市では災害時だけではなく、日頃の救急時の適切な医療活動等を行えるように「救急医療情報キット」を、一人暮らしの高齢者や高齢者世帯に配布をしています。キット中には、緊急連絡先・既往歴・かかりつけ医等の情報が入っています。事業所ができる始めの一つとして、私たちが関わる利用者宅の保管状況や情報内容の確認をおこないました。紛失されている方や未配布の方もおられ、福祉政策課に相談し新たに提供をしていた

梅寿荘居宅介護支援センター

センター長 斉藤 洋子

できました。刻々と状態が変わる利用者の生活に関わる者として、今後も関係機関と連携し、利用者の在宅支援に努めています。



救急医療情報キット

決意を新たに

毎年のように更新される史上最高に暑い夏が終わったかと思えば、あっという間に年が明け、寒い日が続いています。世間ではインフルエンザが猛威をふるっていますが、私は例年通りシモヤケの痛痒さと戦う日々を送っています。

時の流れは早いもので、私が職員派遣研修生として生駒市地域包括ケア推進課基幹型地域包括支援センター係に配属されてから、2年が経とうとしています。基幹型包括支援センターは虐待ケースや支援困難ケース、多問題家庭や生活困窮等の対応にあたる事が多いチームです。多くの関係機関と連携するにあたり、それぞれの立場があるが故の難しさや、物事の伝え方の大切さも

生駒市梅寿荘地域包括支援センター

介護支援専門員 諫山 直子

身をもって知る事ができました。私達の支援は、ご本人の生命を守る事、権利を守る事だという事、支援には必ず根拠があるという事も改めて確認する事ができました。市役所職員の方を始め多くの方に助けて頂き、このような貴重な研修の機会を与えて下さった方々に感謝しています。

残り少ない研修期間ですが、1つでも多くの事を学び、身に付けたいと思っています。梅寿荘地域包括支援センターに戻った際には、この研修で学んだことを日々の業務に活かしながら、虐待や支援困難ケースにも積極的に関わっていかうと決意しています。

令和6年度を振り返って

デイセンター寿楽では、令和6年度にさまざまなイベントを企画・実施しました。4月には、近隣の川沿いでお花見を楽しみ、満開の桜の下で会話に花を咲かせながら春の訪れを感じました。BBQやさんま焼きでは炭火で焼いた香ばしい料理をご利用者の皆様とともに味わい、食を通じて季節の移り変わりを感じられるような行事食を提供してきました。その他にも、運動会や敬老会、クリスマス会やお餅つきなどの恒例行事は大切にしながら、コロナ禍で中止していた外食会も再開し、にぎり長次郎での食事会を開催することができました。「やっぱり外で食べるお寿司は格別」とご利用者に喜んでもらえ、普段とは違う雰囲気の中での食事を楽しめました。また、創作活動では、ご利用者の皆様とともに、富士山をモチーフにした壁画アートを作成し、1年を通して季節の移り変わりを体感できるような作品を制作しました。

今後もこうした季節行事を中心に何気ない日常や、季節感を大切にすることで、ご利用者の生活に寄り添い、サービスの質を高めていきたいと考えています。

一方で、地域の方々と協働する行事については、職員不足などの理由により、実施を見送らざるを得ませんでした。年間行事を通して地域とのつながりを深める貴重な機会がたくさんあっただけに、

デイセンター寿楽

主任生活相談員 中島 淳

残念ではありましたが、次年度の課題にしていきたいと思います。

今後も、ご利用者一人ひとりのニーズに寄り添いながらサービスを提供し、地域に根ざした活動により一層努めてまいります。



壁画アート前での記念撮影

創立20周年

記念式典

「こども支援センターすなろ」創立20周年記念式典を生駒市北コミュニティセンターISTAはばたきホールで12月7日(土)開催しました。

174号のひめゆり通信「法人たすきリレー」では前号に続いて「あすなろ20周年特集」をお送りします。

20周年ロゴ



このロゴマークはあすなろの利用児のお母さんでもあった、糸瀬さんに制作してもらいました

感謝とエール

創立 20周年記念式典



あすなろ20年の感謝と子どもたちの未来へエールを送ります ♡

職員の思い



こども支援センターあすなろ 主任保育士 佐伯 佐知
今まであすなろを支えてくださった皆様と共に、歴史を振り返り、今も昔も変わらないこどもの笑顔と保護者の方のこどもへの愛と職員の高い想いを再確認した二十周年記念式典でした。終わった後はしばらく放心状態…余韻に浸りました。これからもお母さんお父さんとたくさんお話しし、泣いたり笑ったりしながら、こどもたちの可能性を信じ、未来へ向けて全力で応援します。

座談会



創立当初と10年前にあすなろを利用されていた2組の親子。あすなろでの思い出や卒園後の状況を語ってもらいました。一人で成人式に参加した森川大樹さんと、スマホに写っていたいっぱいの仲間に囲まれたご息の様子に涙されたお母さんの泉さんのエピソード。そして、前向きな中学校生活を送っている川上碧さんの楽しげな様子や、お母さんの菜穂さんからの「今、先の見えないことで不安を抱えられていても、希望を持ってください」という力強いメッセージ。大きくなった2人のお母さん方のお話しに会場は暖かい空気に包まれました。

子ども支援センター あすなろ

思いを繋ぐ
法人たすきリレー

第9回



オープニング

職員によるマツケンサンバ!! 記念式典を楽しく盛り上げようと華々しく踊りました。日々の保育でもダンスしていたので子ども達も嬉しそうに踊っていました。



コンサート

「ほくときみ。」記念コンサート

「ほくときみ。」さん
による楽しい
パフォーマンスで
会場は
盛り上がりました!



ご挨拶



主催者を代表して辻村泰範理事長の挨拶(右)
来賓を代表して小柴生駒市長からのご挨拶(左)

児童施設より

10p

いこま乳児院

11p

愛染寮

平城児童センター

12p

児童発達支援センター仔鹿園

いこま乳児保育園

13p

奈良県発達障害者支援センターでいあー

極楽坊あすかこども園

14p

児童発達支援いっぼ

あすかの保育園

15p

いこまこども園

1年を振り返って

乳児院に就職をして7年目となりました。それまでに幼稚園等での経験はありましたが、施設は初めてでした。そんな私が、1年間のリーダー研修を経て4月よりクラスリーダーとなりました。研修でまずは自分の弱みと強みを知ることを学び、自分を振り返った時、「人前で意見を伝える」「様々な意見をまとめる」「自分の思いや意見を積極的に発言する」どれも私には苦手なことばかりでした。

そんな私がクラスをまとめる・他のクラスとの連携を図る・院全体をみる・子ども達だけではなく職員への理解も深めるなど、リーダーとしてやっていけるのかと最初は戸惑い、不安ばかりでスタートしました。会議やミーティングに参加することにより、院長・副主任がよりよい乳児院にするために様々なことに携わってこられたことを改めて知ることができました。



いこま乳児院

保育士リーダー 石村 佐恵

まずは、クラス職員が協力し合いクラス内の課題を話し合うことで共通認識し、チームとしてまとめることも、先輩方のアドバイスのお陰で出来たと思います。リーダーとしてはまだまだ力不足だと思いますが、私自身の小さな成果としてはクラス全体が良い雰囲気終盤を迎えられたことはひとつの自信に繋がりました。今後はクラスだけでなく院全体に視野を広げ、責任ある職務に就いた以上、弱みを克服するために与えられた任務だと思い励んでいこうと思っています。

子どもたちにとって居心地の良い居場所であるためには、職員にとっても同じように思える職場づくりをしていきたいです。



2024年も子どもたちと季節の行事を満喫しました。春はいちご狩りで口いっぱいいちごを頬張りました。夏は、奈良県の児童福祉施設連盟主催の臨海訓練で泳ぐ練習をしつつ海水浴を楽しみました。海の里帰りで学童は和歌山、幼児は海水浴とおもちや王国で夏を満喫しました。秋はみかん狩りや運動会を楽しみました。冬はクリスマス会や餅つき、おせち料理に舌鼓を打ちました。USJに招待していただき、様々なアトラクションに乗ることができました。

こうみると1年中楽しんでばかりだったように思われがちですが、私自身今年1年体調をよく崩していたように思います。新型コロナウイルスがら類になったとはいえ体調管理はまず大人が徹底しなければならないと再認識した1年でした。愛染寮のこども達の中にも体調を崩す子もそこそこいましたし、集団生活をしている分、子どもたちの体調管理にも一層気を付けないといけません。

児童指導員幼児ホームリーダー 中嶋 健太

手洗いうがいはもちろん、好き嫌いをなく食事をすること、早寝早起き、外遊びを励行して子ども達を守っていきたくと思います。大人が体調を崩すとしわ寄せは子どもたちにいくので子どもたちの為にも体調に気を配りつつ、新しい年も子どもたちと行事を全力で楽しむため、大人も子どもも健康第一!ですね。



あいぜん夏の臨海訓練、火の鳥に遭遇!

新たな取り組み 地域のふれあい活動に参加して

10月27日に平城地区ふれあいまつり(主催平城地区ふれあい祭り実行委員会)にセンターも参加する機会をいただきました。

まつりは11時にスタートし3時までの予定でしたが様々な店が出店され親子連れを含め多数の参加者で大変な盛り上がりでした。

平城児童センターはスーパーボールすくいの店を出しました。

こどもたちにとって「祭り」はいつもは参加して楽しむのが普通ですが、今日は自らお店を出し「ポイを渡す、お金を受取る、すくったスーパーボールを数える、お客さんに順番に並んでもらう、ポイやスーパーボールの残数を数える」などの役割を四人一組で順番にしてもらいました。

時間ぎりぎりまで数多くのお客さんが来てくれて大変忙しい役割(最後には用意したスーパーボールが不足するぐらいの盛況)でしたが、来てくれたこどもたちが楽しそうにスーパーボールすくいをしている姿にやりがいと満足感もあったようです。

いつもこどもたちはふざけたことなどを話したりしていることもありますが、「頑張ってくれて

平城児童センター

センター長 俎徠 おさむ

ありがとう”と言うと”いやあ、こんな経験、したくてもできないから・・・。”と。こどもたちの成長を感じるとともに心が熱くなりました。

当番以外の空いた時間はみんなも交代でいろいろなお店をまわり、楽しい「祭り」を過ごすことができました。

今回は初めての機会でしたが、今後とも新しい多様な活動にも積極的に参加しこどもたちの社会的な体験活動を広めていきたいと思っています。



今年度を振り返って

令和6年度は障害福祉サービスの報酬改定など制度内での変更が多く、それに伴う書面での業務も多い一年となった。ただ、大きく変わらなかったことは、毎日仔鹿園、ばんびにこどもたちが元気に通ってきてくれたこと。「園長せんせい」と声をかけてくれるこどもや、ずっと傍に来て手をつなぎ笑顔で応える子、ちらっとこちらを見な

児童発達支援センター仔鹿園

園長 田中 一嘉

から元気に走り抜けていく子等、その子その子の挨拶をしていきます。とつてもパワーが湧いてきます。「みんな違ってみんないい」という歌がありました。まさに仔鹿園、ばんびの子どもたちがそれぞれに「みんな違ってみんないい」なのです。これからも変わらない笑顔の広がる場所であり続けたいです。

今年度を振り返って

早いもので今年度も残り三ヶ月となりました。元気に笑顔で子ども達と新年を迎えられたことを嬉しく思います。

今年度いこま乳児保育園では、〇歳児クラスで手ぶら登園の導入という新たな取り組みを実施してきました。手ぶら登園とは、保育園に紙オムツやおしりふき、エプロン、手口ふきなどが直接届くサブスク型月額定額サービスの事です。以前からサブスクについて色々調べている中で、手ぶら登園という存在を知り、園でも取り入れようか模索していました。手ぶら登園を実施する前に、保護者の方にアンケートを取らせて頂き、全員が手ぶら登園に興味があるという結果でした。そこで、7月に一ヶ月間、オムツのみお試し期間として実施しました。保護者の利用後の感想では、「毎日オムツに名前を書いて準備するのがなくなった事で朝の準備が楽になった。」や「保育園に持ってくる荷物が減ったのが良かった。」などの感想を頂きました。その後、保護者の方の意見を元に8月よりオムツに加えておしりふき、エプロン、手口ふきも取り入れることになりました。導入前は、補充分のオムツが無くなった際は園用のオムツ

いこま乳児保育園

保育士 吉川 瑞莉

を販売したり、エプロンやおしぼりを使う際は、その都度子どもの個人マークが書いた入れ物から取り出したり、片付ける際の入れ間違いがあったりしました。導入して良かった点は、オムツは一日何枚使っても良く頻繁に替えられる為オムツかぶれの予防にも繋がり、エプロンや手口ふきは使い捨てなので衛生面でも安全に使い、片付ける際の入れ間違いも無くなりました。又、食事前後や午睡後など忙しくなる時間帯に子ども達に触れ合える時間が増え、排泄や着脱など一対一でゆったりと関われるようになった点だと思えます。手ぶら登園を導入する中で、保護者の方と保育士の両方の負担軽減に繋がっていると感じました。

その反面、一歳児に進級すると、食事のエプロンが不要になったり、トイレトレーニングが始まったりしていきます。保護者としては進級した際も継続して手ぶら登園を導入してほしい希望があるようですが、園としてどう考えるのかが課題として挙げられます。今後すぐに、この課題に対して園全体で意見を出し合い、子ども達の笑顔に繋がっていくよう努めていきたいと思えます。



オムツはサイズごとに



同じエプロンでゆったりと

相談員 菅原 史登

でいあーの日常業務では主に発達障害に関わる当事者・ご家族の相談に対応しています。今年度も地域の様々な支援者の皆さまから多大なご協力をいただきながら、支援をさせていただきました。ありがとうございました。

さて今年度はこうした日常の相談支援とは異なる業務に参加し、とても印象に残りました。それはDWAT(災害福祉派遣チーム)の研修です。DWATは災害時に避難所内の要配慮者(高齢者・障害者・子ども等)への支援を行い、避難者の生活機能低下などの二次被害を防ぐために活動する、福祉支援者のチームです。今年度は研修に3回参加しました。座学で活動の基本になる考え方を学んだほか、避難者役に聞き取り・アセスメント

を行う演習もありました。2024年1月に発生した能登半島地震に派遣された実際のDWAT活動のお話を聞くこともできました。高齢者福祉分野など多職種の皆さまと一緒に演習に取り組めたことも非常に貴重な機会だったと感じております。法人のメンバーとして研修に参加させていただきありがとうございました。

発達障害の支援に立ち返ると、目の前の相談者の方に災害などの緊急時があったときにどのような支援が必要か、考えさせられる1年となりました。日常業務でできることが緊急時の支援にもつながってくるという視点で来年度も取り組んでいきたいと思ひます。

オリンピックの感動を作品に込めて

極楽坊あすかこども園

園長 辻村 泰聡

毎年11月に開催している作品展。今年のテーマは、夏に開催されたパリ五輪にちなんで「なかよしオリンピック」でした。ホールの舞台には、開会式が行われたセーヌ川に見立てて船を浮かべ、子どもたちがパレードをしている様子を表現しました。また、壁面には柔道、水泳、スケートボードなど、様々な競技種目をかたどった作品が並びました。パリ五輪開催中には、園の掲示板にもメダルを獲得した日本選手を紹介し、メダルがどんどん増えていくのを毎日見に来る子どももいて、オリンピックの印象も強く残っているようでした。そしてホールのまん中にはエッフェル塔ができあがりしました。高いホールの天井に届く…とまではいきませんが、子どもたちの背丈よりもうんと高いその

迫力に目を輝かせていました。作品展は、保育の中での絵画や造形を通じた表現活動として開催していますが、ただテーマに沿って描く・創るだけでなく、子どもたちの日常から生まれてくる関心や経験とつながって、さらに発想が広がったり、探究心が芽生えたりすることを大切にしながら保育を進めています。作品はあくまで保育活動の結果であって、完成までの試行錯誤や工夫を重ねたプロセス、そして友だちや先生と話しあったり、喜んだり、悩んだりすることに大きな意味があります。すなわちそれが「経験」という糧になるからです。今後も、子どもたちが豊かな経験を得られるように保育の質を高めていきたいと思ひます。



まだまだ現役!?

施設のCDデッキが「ま・た」壊れました。「ま・た」としたのは、施設が開所して12年。これで4台目です。機械物には当たり外れがある…とは言いますが、「壊れるペース、早くない?」思いつつ毎日使う物なので、「修理が駄目又は、修理代が高くつくなら買ってくれるでしょ!？」と、心の声が聞こえてきそうな職員の眼差し。ちょっと待って。買うのは簡単じゃないのよ…つぶやきながら、ふと思いついたのは、10年近く使われずに倉庫に眠っていた「オーディオアンプ」です。祈る思いで作動させると、軽快な音が聞こえてくるではありませんか! 「オオ～、まだ現役だったのね! ありがとう!」と思わずアンプをなでなでしました。今は教室の中で、大きい代物ではありますが、快適に使ってくれています。お金を使うところ、財布の紐を締めると

児童発達支援いっぽ

児童発達支援管理責任者 長野 智子

ころ。新米施設長の私には、まだわからないところだらけです。ただ今年も、物も人も大切に。そして工夫する事を忘れない! をモットーにして職員にも伝えていけたらと思います。



今年も獅子舞さん、来た～!

みんなで作った段ボール迷路

今年度私は、子どもたちの個性が光る、とつてもにぎやかな4歳児を担当しています。子どもたちは運動会を経験して、友だちと力を合わせて遊ぶ楽しさを感じるようになってきました。あそびが広がっていく中で子どもたちがはまったのが、段ボールを使った迷路作りです。きっかけは子どもたちからの「部屋全部を迷路にしたら楽しそう!」という声でした。そのアイデアに他の子どもたちも興味をもち、みんなで取り組みました。

最初段ボールを立てるのが難しく、何度も倒れてしまいました。すると普段はあまり自分の思いを口にしない子が、「ここを押さえたら立つかも!」「テープを貼れば大丈夫!」と、自分から意見を伝え始めたのです。友だちと支え合いながらトンネルの形にしてテープを貼ると、段ボールが自立することができて大喜び。それから毎日みんなで話し合い、工夫を重ねながら新たな形を作り、最終的には部屋いっぱいの大きな迷路ができて上がりました。また、異年齢児を招待すると手を引いて案内したり、「ここは行き止まりだからこっちだよ!」と教えてあげたりする姿が見られました。さらに「もっと面白くしたい!」という声から部屋を暗くしたり、トンネルの出口に布を掛けたりしてお化け屋敷に発展すると、ちょっぴり怖さも増して盛り上がりました。こうして私も子どもたちと一緒に、どんどん広がるあそびにワクワクしながら楽しい時間を過ごすことができました。

あすかの保育園

リーダー保育士 原田 愛子

振り返るとこれまでの活動は“こういう経験をしてほしい”という保育士発信のあそびが多かったように思います。けれど今回は、“迷路が作りたい”という子どもの思いから始まり、友だちと意見を出し合いながら協力して作り上げていました。その過程で、子どもたちは夢中になれるあそびの中では自分を表現できるのだなと改めて感じ、クラス全体が1つになって楽しむ時間を生み出したことは、私にとっても大きな学びになりました。

これからも子どもたちの思いを大切に、主体的にあそびや活動を生み出していける環境を整えながら、一緒に楽しい経験を重ねていきたいと思っています。



「迷路作りは楽しいな」

今年は「乙巳」。この2つの組み合わせである乙と巳には、「努力を重ね、物事を安定させていく」といった縁起のよさを表しているといわれています。毎年年末に5歳児が手製の干支カレンダーを作成して、お世話になっている方々へ感謝を込めてお配りします。また、秋に行われた運動会で「夢風船」を飛ばし、拾っていただいた方々にも、お送りしています。今年は滋賀県から三重県にかけての地域から風船のお便りがありました。中でも甲賀のゴルフ場で拾われた方は女子プロの方で、カレンダーを手にして「幸運なご縁を大切にしたい」と、子ども達に玩具のゴルフセットを送ってくださいました。また風船のご縁の古くは平成7年度から続いている長野県の方もおられ、もう30年も毎年子どもたちへとリンゴを送っていただき親交を重ねています。

昨年本園は創立70周年を迎え、新たな1歩を踏み出しました。お心を寄せていただいております皆様と共に、子どもたちをまん中に力を合わせ、

一年を明るく元気に、そしてこころ豊かに過ごしていきたいと思います。



カレンダーをお送りしました



そーっと、うつんだよ(5歳児)



ころころ、おもしろいね(2歳児)

令和6年度 役員会等報告 (令和6年10月～令和7年1月)

- 【第2回 法人理事会】** 令和6年12月4日(火) 桃李館研修室
- 第1号議案 令和6年度上半期事業報告及び今後の事業計画について
 - 第2号議案 令和6年度第一次補正予算(案)の承認を求める件
 - 第3号議案 理事長、業務執行理事の職務執行状況を報告
 - 第4号議案 諸規定の改正について
 - 第5号議案 給与規定の一部改正について承認を求める件
 - その他

リーダー研修 第2回 ～チーム・組織論～

特別養護老人ホーム延寿
研修委員 大崎 万季

令和6年10月8日(火) 法人本部 桃李館にて17名の受講生の参加がありました。

第2回目は、「チーム・組織論」についてあくなみ苑 田中将史苑長 より1日を通して学びました。午前中は、「チームリーダーに求められる役割について学び、活気と意欲にあふれる職場づくりを目指す」をテーマに講義中心で行われました。午後からは、5～6人が1グループとなり、グループワーク、グループディスカッションが行われ、様々な職種間の意見交換が活発になされていました。“マシュマルチャレンジ”というゲーム形式のワークでは、限られた材料(マシュマロ・乾麺・ Pasta・

テープ・ひも)で、いかに高いタワーを作れるかをチームで競います。発想力・計画性・実行力などリーダーに求められる力をフル活動させて取り組んでおられました。

リーダー職は、共に働くメンバーのできる能力や苦手な事も見極め役割を与えることと、円滑に働ける職場の環境を整えることなど様々な役割を担っています。大変な役割ではありませんが、チーム内の士気やモチベーションを高め、チーム目標に向かってより良い援助ケアに取り組んでいただけることを期待しております。



リーダー研修 第3回

極楽坊あすかこども園

県外視察

研修委員長 辻村 泰聡

～社会福祉法人 南山城学園～

第3回は、リーダー研修としては初めて、他法人の視察研修に出かけました。南山城学園は、城陽市に本部があり、障害者入所施設からはじまった法人で、現在では介護施設やこども園など幅広く経営されています。午前中は法人本部構内にある建物で説明を受けた後、障害者入所施設、介護老人保健施設を見学し、法人で経営されているオープンカフェで昼食の後、大阪府島本町に移動し認定こども園を

見学しました。どの施設も手入れの行き届いた過ごしやすい空間になっており、利用者の皆さんもゆったりと過ごしておられました。

また、法人の研修体制や地域連携などについても担当の方から詳しく話を聞くことができ、「うちの法人でもできるかな」と多くの刺激と学びを得て帰りました。参加者の皆さんも、他法人の現場を見ることができ、充実した一日になったことと思います。



リーダー研修・第3回 南山城学園にて

法人リーダー研修を受講して

いこま乳児院

保育士リーダー 川田 理世

第一回のコーチングトレーナーの大川郁子氏による研修の中で印象に残ったことは、相手が悩んでいることに対してこちらが助言をするのではなく、相手がどうしたい(どうしたかった)のかを言語化してもらい、そのためにどうすればいいのかを相手と一緒に考えるということです。私は後輩職員の悩みに対して答えを出したり助言したりすることがリーダーとして求められることだと考えていたため、今回の研修は自身のリーダーとしてのあり方を見つめ直す機会になりました。また、相手との信頼関係や聞く姿勢以外にも、話をする空間や座る位置関係などによっても話しやすさが変わることを知りました。

第二回の研修では、会議を効果的に運営するためには提案や意見を否定しないことはもちろん是非をすぐに問わなくてよいこと、司会者自身の意見は極力出さないこと、参加者同士の一対一での話し合いを避けることが望まれると学びました。毎月行っているクラスミーティングにおいて今後意識して取り入れていきたいと思えます。

第三回の研修では社会福祉法人南山城学園の施設を見学させていただきました。大阪府島本町にある認定こども園ゆいの詩は芝生の

園庭を囲むように園舎が立っていました。「子どもが、まんなか」を掲げておられ、園児が自分のしたい遊びができるよう自由に部屋を行き来している姿が印象に残りました。また、壁に張った紙に園児がしたいと言ったことを書き出してそれぞれを枝のように繋げたりグループに分けたりしていき、それを基に日々の保育を行っていると話がありました。子どものしたいことを大切に、一年を通してつながりのある保育を行っていることが素敵だと思い、自身が所属する施設にも取り入れられる部分があるのではないかと考えました。

南山城学園では採用方法に、採用後一年毎に保育・障害・高齢など他部門(他施設)へ異動し、五年目以降は経験や希望を基に配属された施設に勤務する「スーパーローテーション制度」を取り入れています。様々な分野を経験してから配属先を考えられることは大きなメリットになると感じました。

三日間を通じてグループワークや休憩時間などでそれぞれの施設が抱える悩みなどについて話すことができました。その中で自分とは異なる見方や考え方を知ることができ、大変学びの多い研修となりました。

～いっしょに探そう、つながる支援～

令和7年1月26日(日)
生駒市コミュニティセンター文化ホール

子どもまん中社会の実現をコンセプトにそれぞれの施設で日々実践してされてきたことを発表されました。

大会当日は200名以上が参加されて盛大に開催されました。

第28回 宝山寺福祉事業団 研究発表会



ポスター
セッション
プレビュー

福祉サービス向上に向けた
日頃の実践の成果

今年はサービス改善、業務改善、地域連携活動の分野で11施設からポスター発表がありました。プレビュー発表後、ポスターがロビーで展示されました。

第二部

記念講演 “地域へ発信する 小学校の役割”

生駒小学校 校長 石村 吉偉氏



長渕剛の歌で始まった講演でした。先生の今までの体験から、様々な興味深いエピソードが取り上げられてお話が進みました。その中で子どもたちを認めたくさん褒めているかどうか、さらに地域とのつながりの中でどのような役割を担うことができるのか？子どもたちのために今まで受けた恩をつないでいくことの大切さなど多くのご示唆を頂きました。

今回の子どもの施設発表は子どもたちにとって何が大切なのかを考えた発表でした。少しずつ前に進みつつある手ごたえを感じながら同時に課題も見つかりました。今後、各施設で検討されて実践を積み重ねられることと思います。

今回の開催にあたりご支援ご協力頂きました皆様には厚くお礼を申し上げます。次年度は高齢施設の発表です。

奈良県発達障害者支援センターでいあーセンター長 森山 貴司

全国レベル表彰受賞

瑞宝単光章

極楽坊あすかこども園
主幹保育教諭 田中 明美

日本保育協会永年勤続表彰

いこま乳児保育園
保育士 田村 佳奈子

全国乳児福祉協議会会長表彰

いこま乳児院
保育士 窪田 多貴子
いこま乳児院
管理栄養士 細見 繁子

全国老人福祉施設協議会会長表彰

(20年)

特別養護老人ホームあくなみ苑
介護主任 松本 直大
特別養護老人ホーム梅寿荘
主任介護支援員 堀本 卓史
養護老人ホーム梅寿荘
支援員 吉村 智子

全国老人福祉施設協議会会長表彰

特別養護老人ホーム延寿
生活相談員 田中 泰子
特別養護老人ホーム延寿
生活相談員 飯塚 耕平
特別養護老人ホーム延寿
介護職員 中島 裕允
デイセンター延寿
主任生活相談員 黒葛原 厚子
居宅介護支援センター延寿
介護支援専門員 飯塚 福子
居宅介護支援センター延寿
介護支援専門員 兼澤 依子

表彰

表彰受賞

令和6年度 法人永年勤続表彰

45年

極楽坊あすかこども園
主幹保育教諭 松久 由美子

35年

仔鹿園

児童発達支援管理
責任者・保育主任 雄谷 恵美

こども支援センターあすなる
相談支援専門員 谷口 圭永子

30年

極楽坊あすかこども園

保育教諭 矢島 智穂

こども支援センターあすなる
主任保育士 佐伯 佐知

25年

極楽坊あすかこども園

保育教諭 木戸 巳貴

保育教諭 林 祥子

こども支援センターあすなる
児童発達支援管理
責任者・保育士 安西 貴志

20年

特別養護老人ホームあくなみ苑

介護主任 松本 直大

特別養護老人ホーム梅寿荘

主任介護支援専門員 堀本 卓史

特別養護老人ホーム延寿

生活相談員 田中 泰子

特別養護老人ホーム延寿

生活相談員 飯塚 耕平

特別養護老人ホーム延寿

介護職員 中島 裕允

デイセンター延寿

主任生活相談員 黒葛原 厚子

居宅介護支援センター延寿

介護支援専門員 飯塚 福子

居宅介護支援センター延寿

介護支援専門員 兼澤 依子

いこま乳児保育園

保育士 田村 佳奈子



◆編集後記



2025年は昭和元年から数えて、ちょうど百年目だそうです。私も昭和生まれの古い人間ですがホテルの予約と飛行機の子チケットをどうにかこうにか携帯電話でとりながら世の中は随分変化したものだと感心しています。

十年一昔といいますが、そのころは国内旅行へ行くにしても旅行会社に出向いていたものでしたが今はインターネットが繋がってれば何処にいても様々なことが出来てしまうという大変便利な世の中になりました。有難いことです…いやちよつと待つて!私のようなアナログな昭和人間にしてみたら便利になったのか、はたまた難儀になったのか… <森本>